

迫りくる  
大都市の  
過疎

# 多摩ニュータウンが デッドタウンにならなかったために

# 首都大学東京と地域社会の連携

川廷宗之

大妻女子大学名誉教授  
多摩の横山支局長



豊かな自然発、  
コンクリート・ニュータウン着

かつて（今から60年くらい前

まで）、東京の西にそびえる高  
尾山から横浜市を経て三浦丘陵

（平島）方面に向け、東京都

の南側を流れる多摩川とその南

の境川の間に多摩丘陵という縁

豊かな、そう高くはないがしつ

かりした山並み（一部里山）が

広がっていた。この多摩丘陵と

三浦丘陵は地形がイルカの形に

似ていることから「イルカ丘陵」  
とも呼ばれる（図1）。

かつて、この多摩丘陵の谷間

を中心に農地が開かれ、そこは  
馬の産地だったり、カイコの生

産が盛んで、絹織物の产地だつ  
たりした。この多摩丘陵がにわ  
かに騒がしくなるのは、1960年代の半ばからである。

多摩ニュータウンや港北ニュータウン（横浜市）の開発が始まつた。1970年代から1990年ごろにかけて、山を削り谷を埋めて整地した所に中高層住宅が立ち並ぶという多摩ニュータウンと、同様な造成は行つたが主に区画整理で宅地分譲中心の開発が進んだ港北ニュータウンという違いはあれ、急増する都巿住民の受け皿としての住宅地の開発が進み、そこに大量の移入者が住み着いていった。



図1 多摩丘陵はイルカの形に似ている。  
(首都大学東京・ひなたブック製作委員会編)

コンクリート・ニュータウ  
ン発、オールドタウン着

このニュータウンに最初の入居者が住み着いてから約50年、短いところでも20年近い歳月が流れた。当初20～40代の核家族が中心で子どもがあふれていた。新たに鉄道が開通し、学校が足りなくて次々と新しい（小・中・高等）学校ができた。街区の近隣商店街もそれなりに繁栄していた。しかし、その期間は長くは続かなかつた。新設された（小・中・高等）学校はわずか

20年ほどで統廃合され、廃校となつた。校舎は利用はされていながら多すぎて利用しきれない。消費構造が変わつたせいもあり近隣街区の商店街はシャッター街となり、残された高齢者は買い物に困るという状況になつてゐる。

子どもたちの声が棟と棟の間の芝生にワーンと反響していた団地は、その子どもたちが都会に去つて、60~80代の居住者ばかりになり、今はシーンと静まり返つてゐる。その結果、ニュータウンではなく、オールドタウンと言われたり、介護問題は

当たり前になり、孤老死も喫緊の課題となつたりしている。多摩ニュータウンは、こうなることを想定して、事業所を誘致するシステムを最初から持つてゐたので、ある程度の事業所や大学などが立地していて、その努力の結果、若者の姿がないわけではないが、どうやら焼け石に水のよう、関係者の印象は圧倒的にオールドタウンである。

こうなることを予期していだ人たちもいた。  
デッドタウンへの可能性  
かつて、東京では、1930

年代と1955~8年ころに都市の無秩序な膨張を避けようと、ほぼ23区の外側付近（JR山手線から15~20分程度の地域）に幅数キロのグリーンベルトをつくろうという計画があつた（図2）。この構想は、1924年（このころの世界人口は20億人程度、日本の人口は60百万人弱だった。現在世界は約74億人、日本は127百万人）。にアムステルダムで開かれた国際都市計画會議で採択された『大都市計画の七原則』に基づくもので、1920年代からヨーロッパで広まり実践された考え方である。その基本的考え方は人々が自然

と関わる場を持つには、一定の範囲にグリーンベルト地帯が必要だということであり、同時に都市の無秩序な膨張を阻むものであつた。

その意味で、日本でもこういふ動きがあつたことは記憶にとどめられるべきであろう。現実は、当該地域に含まれる北多摩地区の地主たちの猛烈な反対（当時北多摩地域にいた筆者の小学生時代の強烈な記憶の一つ）で実現しなかつた。が、現在からみれば、やはり大都市の広がりとしては適切な範囲だつたのかもしれない。今、若い人々



図2 第一次首都圏整備計画では緑地帯(アミの部分)を定める計画があつた。

### 「オールド」とは言います が、まだまだ何十年もの命

前置きが長くなつたが、こういう地域は、この流れの中で、静かに朽ちて（デッドタウン化）いくしかないのか、というのが、このレポートの問題意識である。現代日本には既に限界集落の問題があちこちで起きてゐる。このオールドタウンは、ある意味で限界集落問題の大都市周辺地

は、基本的にこのグリーンベルトが想定された内側（ほぼ23区内）に移動していく。その結果、多くの団地群は、置き去りにされた高齢者たちを中心の静まり返つたオールドタウンになりつつある。このような地域は、多摩ニュータウンに限らず、東京近郊では、23区と国道16号線に挟まれた区域にたくさん存在している。放つておけば、現代版おばすて山（日本の人口が6千万人に戻る2080年ごろには廃墟＝デッドタウン）になりかねない。

#### 第1次産業に従事してい

方々を中心とする高齢化地域の高齢者は仕事（第1次産業）という居場所は確保したまま高齢化していくのだが、ニュータウンの高齢者は、従事していた仕事をから定年という形で切られて、言い換えれば居場所を失う形で高齢化するのである。この高齢者たちは、よくは知らない地域で新たに居場所をつくり直さなければならぬ。もしかしたら、家庭も居場所としてつくり直さなければならない。もしかしたら、なぜなら、この高齢化するのである。この高齢者たちは、よくは知らない地域で新たに居場所をつくり直さなければならぬかも知れない。長年、会社の言うとおりにしてきた方々にとって、この居場所づくりは、そう簡単なことではない。

しかも、さらなる問題は長命化である。長命化は全国的現象ではあるが、このニュータウンの高齢者は身体的には元気なのである。どうやら若い日々に大企業等に勤務していた経験者が

# 迫りくる 大都市の 過疎

人間の生物学的寿命の限界は  
120歳くらいだと私が学んだ  
のはもう30年以上も前だが、最  
近の資料では寿命はもつと延び  
る傾向がある。現実的な問題と  
しても、某学会が高齢者の定義  
を75歳以上に変えようと提案す  
るくらいでもあり、このオール  
ドタウンの高齢者たちにとつて  
100歳超えは当然の状況にな  
りつつある。ということは、今  
定年を迎えるオールドタウンの  
(大都市の都心部に通勤するこ

多いせいか、ある程度の豊かな食生活や健康管理が行き届いていたのか、農山村地区に比べて特に男性は元気である（都道府県別平均寿命でも男性は大都市地区の上位県と農山村地区が多い下位県で3・5歳程度も違う）。これに対し女性は大都市圏もそれほど上位ではなく下位県との差も1・5歳程度の違いにとど

沢なサービスを提供していたのが、多数の対象者に原資が減少する中でのサービスを迫られていいくことになる。全国でも同様の現象が起きてはいるが、ニュ

の職員も少なくなっている（それに気が付かない特別職を含む公務員も少なくないが……）。

は昔は人々がタケノコを掘りたり山菜を摘んだりして日常生活に生かすなど、いろいろと出入りしそれなりに管理されてい

人間の生物学的寿命の限界は120歳くらいだと私が学んだのはもう30年以上も前だが、最近の資料では寿命はもっと延びる傾向がある。現実的な問題としても、某学会が高齢者の定義を75歳以上に変えようと提案するくらいでもあり、このオールドタウンの高齢者たちにとつて100歳超えは当然の状況になりつつある。ということは、今定年を迎えるオールドタウンの（大都市の都心部に通勤するこ

多いせいか、ある程度の豊かな食生活や健康管理が行き届いていたのか、農山村地区に比べて特に男性は元気である（都道府県別平均寿命でも男性は大都市地区の上位県と農山村地区が多い下位県で3・5歳程度も違う）。これに対し女性は大都市圏もそれほど上位ではなく下位県との差も1・5歳程度の違いにとどまる）。

（とがなくなり日々の大半を近畿地区で過ごす）仲間入りをする年ないし40年（120歳までとする）と現在60歳代の方は2080年ころまで生き残る可能性がある〉の人生を残している。「終活」と言うが、それはせいぜい1～2年で完成してしまうであろう。では残り、何十年をどう過ごすのだろうか。

一タウンからの急激な成長と急速なオールドタウン化地域ではこの傾向は際立つている。街の風景も大きく変わった。かつてあまり見かけなかつた高齢者も、都心に通勤しなくなつた大勢の定年退職者として平日にも街に目立つようになつた。かつての子どもと母親の街は、中高年者のカップルが目立つ街になつた。

り越えていけばよいのであるのか。いろいろな方策が考えられるであろう。ここでは、自然環境との関わりをキーにしながら、広がっていく人間の輪を事例として紹介しながら、考えてみたい。

て管理し、新しく入居してきた人たちとの接点は限られたものになつた。せつかくの緑地が市民の生活の豊かさの実現のために、適切に生かされていないのは、これはこれで問題なのだが、一応現状は維持されている。しかし、多摩ニュータウンの1住区を占める東京都立大学（現・首都大学東京）（敷地面積42万8041.26m<sup>2</sup>、東京ドームの9・15倍）内の30%（13万493m<sup>2</sup>）を占める自然（松木日向緑地）は、そういう管理すらもされず、約20年以上もほぼ全く手入れされない状態に置かれた。

（西・東部地区開発要綱では、車  
実上開発しない（造成工事で手  
をつけない）緑地を住区（開発当  
初の単位となるエリア・開発当初  
は1住区2万人くらいの人口を  
想定していた）面積の30%を緑  
地として残すことになった。

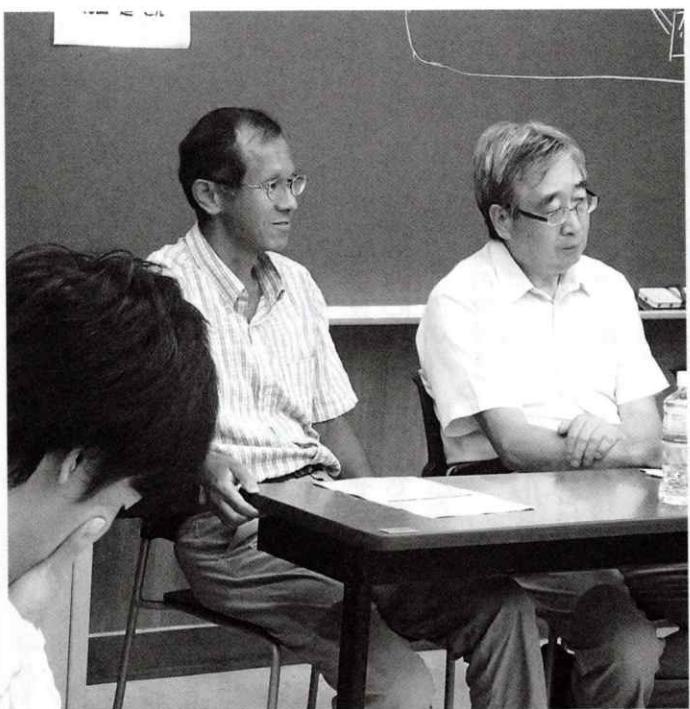
このいわゆる里山である緑地は、昔は人々がタケノコを掘つたり山菜を摘んだりして日常生活に生かすなど、いろいろと出入りしそれなりに管理されてい

た。しかし、ニュータウンに組み込まれ、周りが開発されるとこの管理システムは壊れてしまい、一部の公園は公園として由がいろいろな禁止事項をつくつ

て管理し、新しく入居してきた人たちとの接点は限られたものになつた。せつかくの緑地が市民の生活の豊かさの実現のために、適切に生かされていないのは、これはこれで問題なのだが、一応現状は維持されている。しかし、多摩ニュータウンの1住区を占める東京都立大学（現・首都大学東京）（敷地面積42万8041.26m<sup>2</sup>、東京ドームの9・15倍）内の30%（13万493m<sup>2</sup>）を占める自然（松木日向緑地）は、そういう管理すらもされず、約20年以上もほぼ全く手入れされない状態に置かれた。

したのは2014年の春のことであつた。

なお、これらの動きの背景には2005年から2006年にかけ、同大学・大学院の植物生態学研究室・動物生態学研究室の院生・学生によつて日向緑地を紹介した冊子「ひなたブック」刊行の影響もあつたと思われる(2014年8月に初版3刷が出されている)。



加藤英寿先生(左)と北出進さんとの出会いが、活動を前進させた。(写真提供:首都大学東京ボランティアセンター)

緑地保全活動が始まる

地道な活動の展開を好むお二人で、首都大学東京「ひなたク

「樹の丘団地管理組合」も参加するようになった。

大学にボランティアセンター誕生……協定書が締結される

2016年1月に首都大学東京にボランティアセンターが誕生した。当初の趣旨は東京オリエンピック・パラリンピックに向けてのボランティア養成だった。しかし、ここにボランティアコーディネーターとして着任した足立陽子さんは地域福祉の専門家でもあり、ボランティア活動の目標としてのコミュニティ形成を明確に見据えていた。この松木日向緑地での活動がその足立さんの目に入った。その結果、加藤先生と北出さんで進めてきた活動を、ボランティアセンターの公式の活動として取り上げることになった。これに伴って、

## 学内での緑地関連活動の展開

段階的な修了証を出すなど、学生の成長への展望をはつきり見据えたボランティア活動の展開を図つてきている。

## 松木口向緑地でのナガハシムカ な活動

この「ひなた緑地遊学会」は現役の大学生や社会人を含む30人ほど（主力は定年退職者・男性）で構成され、活動は月2回程度現地に入つて、緑地の整備

「ラブ」として学習会や緑地保全体験を呼び掛けつつ、松木日向緑地の手入れを行っていた。このころ、北出さんがボランティアに入っていた南大沢小学校の親子で、タケノコ狩りとか花炭・竹炭作り等の体験活動を始めたといった。小学生の自然体験の支援活動である。この親子タケノコ狩りには、翌年には柏木小学校も参加し、また地域団体である「もえぎ地域子ども会」や「萌

その後、小学生の体験学習はボランティアセンターと連携し、学生ボランティアと協働実施することになり、今後は、他の小学校や障碍者団体が参加希望をするなど、輪が広がっている。

北出さんたちは任意の集まりで  
あつた「ひなた遊学会」を「ひ  
なた緑地遊学会」という団体と  
して組織化し、大学と「ひなた  
緑地遊学会」との間で「首都大  
学東京と日向緑地の保全管理、  
緑地の利活用及びボランティア  
センターと連携・協力に関する  
協定書」を締結することとなつ  
た。こうすることで、「ひなた  
緑地遊学会」のメンバーは大学  
の敷地内で公的に活動できるよ  
うになつた。

設課などの職員を中心に、緑地の保全や教育研究への活用に関する意見交換の場として、「第1回 大学緑地の将来を考えるつどい」が2015年5月15日(木)に開催された。この「つどい」はこの後年1回開催し、緑地の保全・管理および利活用について、学部を超えて横断的に有志の交流会を開催(遊学会も参加)してきている。

や竹材や間伐材の利活用として、めかい（竹籠）作り、キノコ栽培などをを行うことである。今後の展望として、今までの活動工

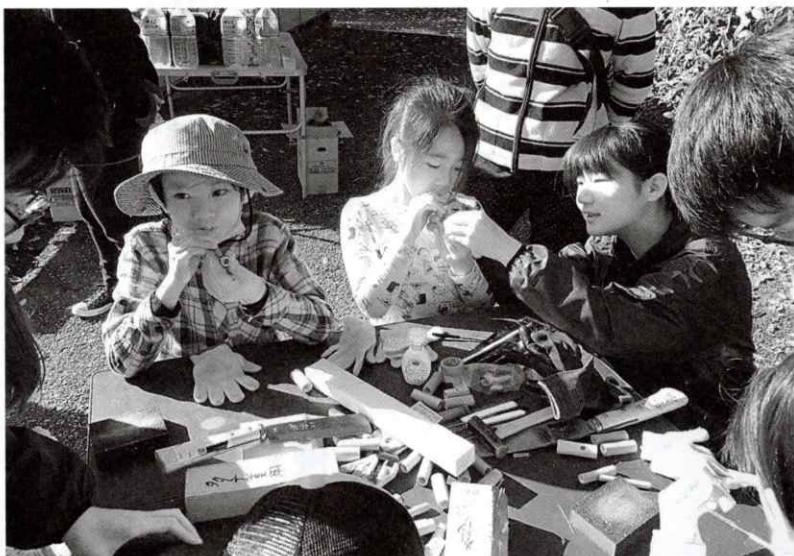
子どもたちと一緒に緑地の整備をする。  
(写真提供:首都大学東京ボランティアセンター)



## 迫りくる 大都市の 過疎

2017年度は当初から目標にしてきた、八幡神社裏の谷戸（水田跡）の整備を開始する予定のことである。これは「ひなた緑地遊学会」の協力の下で、前述の「多摩の里山学」の授業の一環として谷戸の生物多様性を再生する実験を行いながら、いずれは水田復活による小学生のコメ作り体験等にも広げていき、地域と大学の交流を深めていくとするものである。

### 自然との交流と、人間同志の交流…… さまざまな「壁」を越えて



「ひなた緑地遊学会」と地元小学生との竹炭・竹笛づくりの体験会。(写真提供:首都大学東京ボランティアセンター)

リアは主に緑地の東側たつたが、常に貴重な体験である。また、さまざまな人間同志という意味でも、ほとんど同世代か同業種でしか人間関係がない中で、高齢者と子どもの間に大学生が入つてつなぐというのは、壁を乗り越えていく大切なヒントが含まれているだろう。そして、大学と地域社会の壁をボランティアセンターの活動を媒介に乗り越えていくというのも大切な要素である。

### 「統合的生活の知恵」という切符を創り続ける

A.IとかICTとかがどんどん進んでいる。これらが進むたる条件は、あらゆる現象を細かく分析し、一つ一つを概念化して名前を付けていくことである。そ

して一定の名前が付いたら現実の現象は捨象されてしまつて、名前(言葉)だけが行き交うことになると現れる。使わなければ使われるとほど、その言葉の生々しさ

含み」は消えていくてしまう。現代社会でうまく回転しない事柄が増えている一つの理由は、多くの人々がこの「生々しさ」を受け止められなくなっているからではなかろうか。

分析されて出てきた言葉(名前)同士の相互関係は一応定義されている。しかし、現実には、言葉での定義を超えた関係やその集積である現象はたくさん出てくるし、分析しきれていない要素を含めて総合的に把握しなければならないことはたくさんある。それらにどれだけ対応できるかは、「生の体験」をどれだけたくさんして鍛えられるかにかかっているだろう。そして、このノウハウ(切符)を比較的たくさん持っているのが、いろいろな事柄が分析され機械(A.I.)に代替されていなかつた時代を知る人々(高齢者)なのではなかろうか。

その意味で、自然を含めたさまざまな交流が展開しているこのような活動での学びが、いろいろな人にとって(若い人にとっても)デッドタウン行きの列車から、未来創造行きの列車に乗り換える有力な切符の一つになると考えるのだが、いかがであろうか。